

論文

公共の場の語りによる精神障害当事者のエンパワメントの 獲得過程とその特徴

——語り部グループ「びあの」の語りの実践から——

栄 セツコ*

1. 問題の所在

近年、公共の場において、精神障害をもつ当事者による病いの体験を語る活動が散見されるようになってきた。その「語り／ナラティブ」のもつ力を生かしたアプローチとして、ナラティブセラピーやグループにおける語り合いがある。いずれも語りを行った当事者のエンパワメントに有効的であるという報告は多いが、公共の場で語りを行った当事者のエンパワメントに関する研究は管見の限りあまりみられない（栄 2015）。

「エンパワメント」が援助概念として捉えられるようになったのは、1976年にソロモン（Solomon, B.B.）が『ブラック・エンパワメント：抑圧地域でのソーシャルワーク』を著し、ソーシャルワークの領域に「エンパワメント」を紹介したことに端を発する（Solomon 1976）。その後、リー（Lee, A.B.）やグティエレスら（Gutierrez, L.M., Parsons, R.J. & Cox, E.O.）らによって、その実践の体系化が図られた（Lee 1994: Gutierrez, Parsons & Cox 2004）。リーによれば、エンパワメントは「パワーレスな状況にある人々が潜在的な適応力の強化や社会の抑圧構造の変革を目的として、個人的、対人関係的、組織的、政治的次元といったミクロからマクロレベルで、そのパワーを発展させていく過程」と定義される（Lee 1994: 15）。また、グティエレスらは、エンパワメント実践とは個人、家族、集団、あるいは地域が内部からパワーの生成を目指す実践であるとし、伝統的なソーシャルワーク実践は個人的次元や対人関係的次元におけるエンパワメント実践の研究は多いものの、社会的次元である組織的／政治的次元における実践の研究はあまりないと指摘している（Lee 1994: Gutierrez, Parsons & Cox 2004: 19-27）。

語りとエンパワメント実践の関連性では、先述のナラティブセラピーやセルフヘルプグループ等の語り合いは、それぞれエンパワメント実践の個人的次元、対人関係的次元にあたる実践である。その語りの特徴は、語り手と聞き手による対面的で局所的な場の語りであり、その分析は主に語りの内容や構造の焦点化にあるという特徴がある。本研究が対象とする社会的次元（組織的／政治的次元）にあたる公共の場における語りに着目すると、精神保健福祉領域におけるやどかりの里の講師登録者学習会（やどかりブックレット編集委員会編 2005）やべてるの家の当事者研究（向谷地生良 2009）が代表的な実践と言えるものの、これらの実践を対象とした事例研究は個人的次元や対人関係的次元の場と比較した「語りの場」の特性から、そのエンパワメント効果を分析したものではない。このことから、当事者による語りに基づくエンパワメント研究において、面接（個人的次元）やグループの語り（対人関係的次元）に加えて、公共の場の語り（組織的次元／政治的次元）に着目した実践的な事例研究の必要性は高い。

「組織的次元」とはクライアントが直接影響を与えることができるメゾレベルを指し、「政治的次元」は国家や政治等のマクロレベルを指す点に差異がある（Gutierrez, Parsons & Cox 2004）。本稿における「公共の場」とは「組織的次元」を指し、その語りの聞き手は主に「精神障害」を経験したことのない市民や子どもたちを意味する。個人的次元と対人関係的次元の語りによるエンパワメント効果を比較すると、面接の語りによる個人的次元のエンパ

キーワード：精神障害者、エンパワメント、公共の場の語り、リカバリー、社会変革

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2013年度3年次転入学 公共領域

ワメントは自己解放や自己の一貫性等があり、グループの語りによる対人関係的次元のエンパワメントにはモデル・ストーリーの相互獲得や社会の抑圧構造に対する批判的な意識の醸成にあるのに対して (Freire 1979)、公共の場における語りによるエンパワメントは、聞き手の承認や語りに対する報酬の獲得によってもたらされる。つまり、面接とグループの語りは援助者や同様の精神の病いをもつ人々の理解を回路として当事者のエンパワメントが獲得されるのに対して、公共の語りは社会からの承認を回路として、当事者がエンパワメントするという特徴がある (栄 2015)。先行研究によると、組織的次元のエンパワメント実践は個人的次元と対人関係的次元の実践の連続体として表記されることが多く、それらの次元の相互関連性が指摘されながらも、実践事例に基づいて可視化された研究はあまりみられない。それらをふまえて、組織的次元のエンパワメントの過程を図式化すると、個人的次元と対人関係的次元のエンパワメントの連続体に位置し、その段階的・重層的な過程を経て達成されると想定できる (図1)。

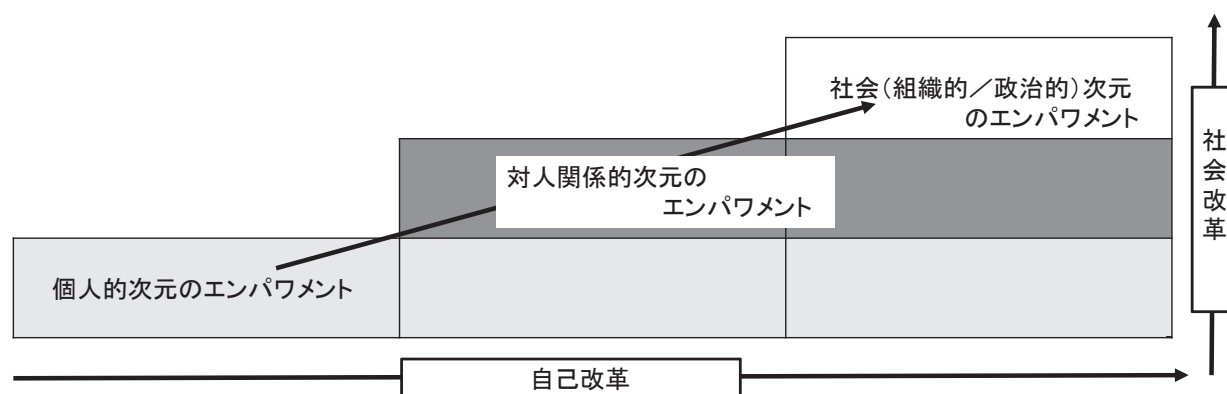


図1 想定されるエンパワメントの獲得過程

しかし、当事者の語りによる組織的次元のエンパワメントは、個人的次元と対人関係的次元のエンパワメントが段階的・重層的に達成されるとは限らず、しばしば個人的次元や対人関係的次元で達成しうるエンパワメントとの矛盾が生まれる。その矛盾とは、本人の「ありのままの語り」は、個人的次元や対人関係的次元では本人のエンパワメントに直結するのに対して、組織的次元のエンパワメントは語りに対する聞き手の反応が影響するため、「ありのままの語り」ではエンパワメントできないことに起因する (栄 2015)。

そこで、本研究の目的は、組織的次元のエンパワメントの獲得過程とその特徴を解明することにある。まず、語りの実践事例として、エンパワメント実践の枠組みに基づいて設計した、精神障害者による語り部グループ「びあの」の活動について説明する。次に、組織的次元のエンパワメントを獲得した事例を基に、その獲得過程を図式化し、先述した段階的・重層的に獲得される組織的次元のエンパワメントを批判的に再考する。

2. 語り部グループ「びあの」とは

語り部グループ「びあの」(以下、「びあの」)とは、精神障害をもつ当事者(以下、当事者)が教育機関に出向き、病いの語りを子どもたちに語るという教育講演会活動を行うグループの名称である。私は援助者としてグループに入り、事務局を担う法人Zの職員と教育講演会活動を企画してきた。この企画の背景には、次の三つの事由がある。

第一は、本活動の企画・運営を担う法人Zでは新施設の建設に対する地域住民の反対運動を経験し、次世代を担う子どもたちが精神障害者に関する正しい知識を得る必要性を強く感じていたことがある。第二に、精神疾患の好発時期が思春期・青年期にあるにもかかわらず、義務教育において「精神疾患」や「精神障害」について学ぶ機会がない現状にあること。第三に、「病いの経験の語り」に価値を置き、それに見合う対価が生じる就労形態の拡大の可能性を探ることである。これらの必要性から、本研究の教育講演会は「外部講師」を担う当事者にとっては一つの就労形態であり、子どもたちにとっては精神障害をもつ講師から学ぶ機会として位置づけられる。中核的な活動は、教育講演会を成功裡に導くための「語り部養成研修」と「現任者研修」である。「語り部養成研修」により総勢18

名の語り部を輩出し、その後の「現任者研修」は教育機関からの要請に応じた語りの内容の推敲と技術の向上等を目指して、月一回程度開催してきた。並行して、援助者は当事者による講演会の実施場所の開拓を行ってきた。しかし、教育委員会等に「びあの」の情報を提供するものの、その場で講演会の実施を快諾した学校は1校もなかった。そこで、法人Zは地域の関連のある学校からスノーボール式に語りの場を確保してきた。教育講演会は主に総合学習で実施されることが多く、クラス単位もあれば、全学年の子どもを対象とする場合もあった。このような学校の現状を「びあの」のメンバーと共有してきた。これを受けて、メンバーは精神障害者に対する偏見を助長しないように、病状等の赤裸々な体験を紡いだ「ありのままの物語」ではなく、病いをもちながらも自分らしい生活ができる／目指す「リカバリーの物語」を作成し、教育講演会に臨んできた(栄2014)。その結果、語りを聞いた子どもたちから肯定的な感想が聞かれるとともに、教育機関から語りの対価を得ることができた。このような「びあの」の活動は2006年度から6年間継続された。

組織的次元のエンパワメント実践として設計した、「びあの」の教育講演会活動に参加した当事者15名(転居等の3名を除く)を対象として、組織的次元のエンパワメントの獲得状況を明らかにするため、先行研究で示された「自己統制」「報酬」「社会貢献」等の判定基準を援用して整理した(Gutierrez, Parsons & Cox 2004:22)。その結果、組織的次元のエンパワメントを獲得した人々は10名であり、獲得できなかった人々は5名だった。組織的次元のエンパワメントを獲得した人々とは、「外部講師」という社会的地位を得て、その役割遂行に向けて「自己統制」ができ、語りに対する聞き手の承認(精神的報酬)や語りの対価(金銭的報酬)を獲得した人々である。本研究では、それらの人々を『語りの活動発展型』(4名)と『リカバリーの物語普及型』(6名)に分類した。一方、エンパワメントを獲得できなかった人々を『ありのままの物語普及型』(1名)と『語りの活動模索型』(4名)に分類した。以下、各々のタイプの特徴を説明する(栄2015)。

『リカバリーの物語普及型』の人々は、「教育講演会」のニーズに合うモデル・ストーリー、すなわち、病いを抱えながらも自分らしい生活を再構築していくという「リカバリーの物語」を語り、その語りをより精巧なものにして、後継者を育てたいと望む人々である。『語りの活動発展型』とは、既に「びあの」を「卒業」し、「リカバリーの物語」に加えて、独自の語りの活動をマクロな政治的次元において模索し始めたタイプである。『ありのままの物語普及型』は、「びあの」の活動を継続しながら、赤裸々な病的体験を用いて物語を語り直したいと望む人であり、「びあの」の活動の枠組みを変更することにより組織的次元のエンパワメントを獲得できた人である。そして、『語りの活動模索型』は「びあの」の活動に参加しながらも自分に適した活動の場を模索している人々である。

3. 研究方法

本研究では、「びあの」の活動に参加している『リカバリーの物語普及型』『ありのままの物語普及型』『語りの活動模索型』に属するメンバーに着目し、その事例研究を行う。まず、組織的次元のエンパワメントの獲得過程の図式化にあたって、本研究の趣旨に適合した『リカバリーの物語普及型』に属するAさんに半構造化面接を行った。Aさんを選定した理由は、『リカバリーの物語普及型』に属するメンバーの発言内容の揺れ幅が狭いなかで、Aさんには他のメンバーを代表する発言がみられ、そのタイプの典型的なモデルと判定したことによる。インタビュー内容は「びあの」の活動の参加による自己変容である。私たちが期待したエンパワメントを、Aさんはどのような表現で説明したのか、その認識に至る獲得過程において何が生じたのかを析出するため、インタビューで得られたデータから鍵となる語録をコード化し、同質性の高いものをまとめてカテゴリを産出した。これらのカテゴリの関連性を図解し、その獲得過程を実線で示した。そして、先行研究が示すエンパワメントの獲得過程を批判的に考察することにした。

次に、組織的次元のエンパワメントを最終的に獲得したものの、先行研究が示す個人的次元と対人関係的次元の連続上に獲得されなかった『ありのままの物語普及型』のEさんに対する参与観察に基づく事例研究を行い、「びあの」の活動枠組みについて再考する。

そして、組織的次元のエンパワメントの獲得が順調に得られなかった『語りの活動模索型』の事例から語りを媒介とした「びあの」の活動の可能性と限界について検討する。

倫理的配慮として、情報提供者には、本研究の趣旨、研修時の録音の取り扱い方及びプライバシーの保護等を口頭と文書にて説明し、同意を文書で得た。尚、本研究は大阪市立大学生活科学部・生活科学研究科倫理審査委員会の承認を受けて実施している。

4. 教育講演会活動の参加による組織的次元のエンパワメントの獲得過程とその特徴

ここでは、先行研究における組織的次元のエンパワメントに即した『リカバリーの物語普及型』の事例としてAさんを採用し、その活動経過を紹介する。先述のように、Aさんの選定理由は、『リカバリーの物語普及型』の人々が組織的次元のエンパワメントを獲得する過程はほぼ類似しており、そのなかでも代表的な発言がみられたことによる。Aさんの組織的次元のエンパワメントの獲得過程は【リカバリーできる自分を信じる】【仲間と共に回復を目指す】【病いの経験知を活用できる市民として社会に貢献する】の3つのカテゴリで構成され、その下位項目として6つのサブカテゴリ、16の小カテゴリが産出された。以下、Aさんの発言の引用文は「 」を用いた。【 】はカテゴリ、《 》はサブカテゴリ、〈 〉は小カテゴリを用いて表示する。また、各語りの場面とそのエンパワメントの次元は（ ）に示した。

【リカバリーできる自分を信じる】

このカテゴリは、援助者との面接で得られた自己変容のフレーズである。Aさんは30歳代で発病し、入退院を繰り返して、法人Zの施設を利用するようになった。援助者や他の利用者からありのままの自分が受け容れられる経験のなかで、精神症状にも安定がみられ、セルフヘルプグループに参加し、ピアカウンセラーとしても活躍していた。

語り部グループ「ぴあの」の参加動機について、Aさんは「偏見を失くしたい。社会を変えていきたい」と語っていた。しかし、今まで病いの体験を誰にも話さなかったというAさんにとって、何をどのように語ってよいのか戸惑いや不安がみられた。その時、援助者による受容的な面接を通じて、Aさんは「安心して内面を語るができるようになった」「自分の理解が深まった」と語っていた。そして、「自分の回復を信じてくれる」援助者の存在を得て、Aさんは《リカバリーできる自分を信じる》必要性を感じていた。

【仲間と共に回復を目指す】

このカテゴリは《当事者の視点を活用できる自分を信じる》と《ピア活動の原点ができる》という2つのサブカテゴリで構成され、メンバー同士の語り合いがみられた段階で生成されていた。

援助者による語りの活動に対する期待の言葉を得て、Aさんは〈リカバリーできる自分を信じる意味を深〉めていた。また、研修におけるメンバーとの病いの経験のわかちあいによって、Aさんは「辛い体験は自分だけではない」と気づき孤独感が緩和されていた。また、他のメンバーの語りを聞くことで、病いをもつ「当事者」意識が醸成され、〈当事者の視点で社会をみることができるようになり、〈回復するエネルギーが強化される〉なかで、《当事者視点を活用できる自分を信じる》と語っていた。Aさんはメンバー同士の語り合いの特徴を次のように説明している。

ルールは「言っぱなし・聞きっぱなし」。ただただ他者の体験を聞く。他者を感じ自分を感じる。アドバイスは「私」を主語にして、自分の体験を語る。安心して話せるから、自分の成長があり、生き方を深めていけるんです。

メンバー同士の語り合いにより、Aさんはモデル・ストーリーを得て〈自己理解が深まる〉体験をしていた。また、自身の語りが他のメンバーのモデル・ストーリーになることで「自分も人の役に立つことができる」と実感していた。さらに、社会にある精神障害者の偏見に悩む語りを聞くことで、Aさんは「社会への関心の高まり」とともに、〈社会への発信方法〉を学びたいと希望した。その発言を受けて、研修では「子どもたちに何を伝えたいのか」をテーマに議論が交わされた。そのなかで、子どもの教育的効果を考慮してメンバーが作り上げた語りは「リカバリーの

物語」だった。Aさんは語りに「差別は恥じること」というフレーズを加えていた。それは皆の意見を代弁するものであり、メンバーに連帯感や仲間意識を生み出すことになった。仲間を意味する「ピア」について、Aさんは次のように語る。

仲間に悩みを話して、悩みは自分だけじゃないと思えたり、自分の経験を話すことで元気になってもらえたり…。自分はこれでいい、人の役に立つという実感が得られたのも、その頃が初めてだったと思います。この経験が自分のピア活動の「原点」になったと思います。

【病いの経験知を活用できる市民として社会に貢献する】

このカテゴリは、《当事者の視点を活用する自己認識が高まる》《仲間と共生社会の実現を目指して学びあう》《病いの経験知を活用した社会的役割を遂行する》の3つのサブカテゴリで構成され、教育講演会の活動がみられた段階で生成されていた。

教育講演会で語る自己物語の作成作業は、自分を客観的に捉えて言語化する必要があるため、Aさんはより一層〈自己理解〉を深めていた。しかし、学校からの「ぴあの」への講演依頼はほとんどなく、依頼されるときは既に「障害理解」「共生社会の実現」などのテーマが設定されていることが多かった。これを機に、メンバーは「ありのままの語り」ではなく、聞き手のニーズに適った語りをする「外部講師」の役割を強く意識することになった。

その後、各々のメンバーは「外部講師」に対する期待と不安を抱きながら「教育講演会」の準備性を高めていた。たとえば、講演会の当日に向けて、聞き手のニーズに応える語りの作成、「外部講師」に相応しい服装の選択、体調管理などを整えることで、メンバーは〈自己統制感〉と《当事者の視点を活用できる自己認識が高ま》っていた。また、メンバー同士の語り合いを通じて、「精神障害者が地域であたりまえに暮らす難しさ」を共有するなかで、メンバーは「共生社会の実現」という「ぴあの」の活動のミッションを確認していた。そして、教育講演会に向けた準備と省察を繰り返すなかで、Aさんは他のメンバーの語りの創意工夫を学ぶ一方で、自身も他のメンバーに語りの経験知を伝えていた。このような〈学びあえる仲間〉の存在を得て、Aさんに〈共生社会の実現に向けた意識が高ま〉り、《仲間と共生社会の実現を目指して学びあう》姿がみられた。

そして、Aさんは外部講師という〈社会的役割を得〉て、教育講演会に臨む。教育機関からの教育講演に対する期待や、「ぴあの」を代表して「外部講師」を担う緊張感を抱えながら、自身の病いの経験を子どもたちに語る。そのため、自身の語りに対して、聞き手の子どもたちが無関心／否定的な反応を示す場合は、Aさんに自己否定感や活動への参加意欲が減じていた。その際、援助者やメンバーから支持を得ることで自己信頼を取り戻し、活動のミッションを再確認でき、語りをより精巧なものにする姿がみられた。一方、子どもたちから語りの肯定的な反応を得ることで、Aさんは「社会的に何の役にも立たないと思っていた自分が（病いの経験を）語ることで社会貢献ができた」と語り、語りの対価を手にすることで「人間性や社会性の回復がある」と述べていた。それを受けて、あるメンバーは「作業所では『利用者』、病院では『患者』、いずれも大勢のなかの一人にすぎない。でも教壇では一人ひとりが主人公、『社会的弱者』ではない」と発言し、別のメンバーは「暗闇の時代に、語り部の使命は大きい。この活動を草の根的に全国的に普及させたい」と希望した。これらの発言に賛同したAさんは「ぴあの」の活動による自己変容について、以下のように語る。

保護されるだけの存在から一人の市民として暮らすと言えるまでに人間性を回復できた。地域の一員としての意識をもつ。自分の生活を組み立てていく、草の根活動を続けることは大切なことと思います。

以上のことから、「ぴあの」の活動に参加したAさんの組織的次元のエンパワメントの獲得過程をまとめると、次のようになる。援助者による受容的な面接を通じて、Aさんは今まで封印していた感情を吐露することで自己解放感や病いの経験の整理による自己の一貫性を体験し、【リカバリーできる自分を信じる】ようになった（面接：個人的次元）。そして、教育講演会の成功を目指す研修に参加し、同様の病いをもつ当事者との語り合いのなかで【仲間

と共に回復を目指し、次の三点に自己変容がみられた。第一に、当事者の視点が生まれ、その視点を活用できる意識の醸成がみられた（グループ：個人的次元）。第二に、モデル・ストーリーの相互獲得を経験し、自己理解の促進とともに自己効力感を体感する（グループ：対人関係の次元）。第三に、自身の生活のしづらさが社会の抑圧構造に因ると気づくことで、社会に対する批判的意識（Freire 1979）と社会への発信に対する意欲がみられた（グループ：対人関係の次元）。その頃より、Aさんは《ピア活動の原点ができ》たと語り、仲間と共に回復を目指す意識と教育講演会の準備性の高まりがみられた（グループ：個人的+対人関係の次元）。

しかし、「びあの」の語りの活動の趣旨に賛同する教育機関は多いものの、実際の講演依頼はほとんどなく、Aさんやメンバーは「精神障害者」に対する偏見を体感する機会となった。そのため、学校のニーズに応じてメンバーが試行錯誤のうえに作り上げた教育講演の内容は、子どもたちに共生社会の大切さをメッセージとした定型化された「リカバリーの物語」だった。しかし、その語りに対して、子どもたちが無関心／否定的な反応の場合は、Aさんに社会貢献の認識は得られず自己否定感を抱くことにもなった。一方、聞き手から報酬や承認を得ることで、Aさんは「外部講師」の社会的役割の遂行を体感でき、社会貢献の自己認識、自己効力感の向上（Conger and Kanungo 1988:471）、自己統制による社会性の獲得（Rotter 1966）、語りの活動の使命感や参加意欲の高まり（Deci 1980）がみられた。また、「精神障害者」「病者」という保護される存在から、病いの経験を他者に生かせる市民、病いの経験から得た教訓を次世代に伝授できる市民へと自己認識の変容がみられた。加えて、Aさんは語りの賛同者の拡大により、共生社会の実現に向けて、公共の語りをブラッシュアップしながら、「びあの」の活動を続けている（講演：個人的次元+対人関係の次元+組織的次元）（図2）。

		《病いの経験知を活用した社会的役割を遂行する》 ・〈社会的役割を得る／遂行する〉 ・〈社会貢献ができる〉 ・〈草の根活動をする〉
	《ピア活動の原点ができる》 ・〈自己理解が深まる〉 ・〈ピア活動の原点ができる〉	《仲間と共生社会の実現を 目指して学びあう》 ・〈学びあえる仲間ができる〉 ・〈共生社会の実現に向けた意識が高まる〉
《リカバリーできる自分を信じる》 ・〈リカバリーできる自分を信じる〉	《当事者の視点を活用できる自分を信じる》 ・〈リカバリーできる自分を信じる意味が深まる〉 ・〈回復するエネルギーが強化される〉 ・〈当事者の視点で社会をみることが出来る〉 ・〈社会への発信方法に関心をもつ〉	《当事者の視点を活用できる自己認識が高まる》 ・〈自己理解が深まる〉 ・〈自分を大切にす〉 ・〈自己統制感が高まる〉 ・〈共生社会の実現の必要性を実感する〉
【リカバリーできる自分を信じる】	【仲間と共に回復を目指す】	【病いの経験知を活用できる市民として社会に貢献する】

図2 個人的・対人関係的・組織的次元エンパワメントの構成要素

このようなAさんの組織的次元のエンパワメントの獲得過程の特徴として、次の二点をあげることができる。

第一に、公共の語りによって得られた組織的次元のエンパワメントの構成要素とその獲得過程に特徴がみられた。Aさんのインタビューによって、産出されたカテゴリを図式化すると、個別面接による【リカバリーできる自分を信じる】という自己信頼感を基盤として、グループ研修による【仲間と共に回復を目指す】という連帯感や相互学習、公共の場の語りによる【病いの経験知を活用できる市民として社会に貢献する】という公共の語りの実施や自己効力感を獲得していた。援助者は先行研究を参照しつつ、組織的次元のエンパワメントにおいて重要な要素である「自己統制」「報酬」「社会貢献」を意味するカテゴリが段階的・重層的にみられることを期待して、「びあの」の活動の企画を設計した。しかし、Aさんの表現は当初の想定したものと微妙に異なり、聞き手の反応に応じて往還的・重層的な過程を経て、組織的次元のエンパワメントに至っていた（図3）。

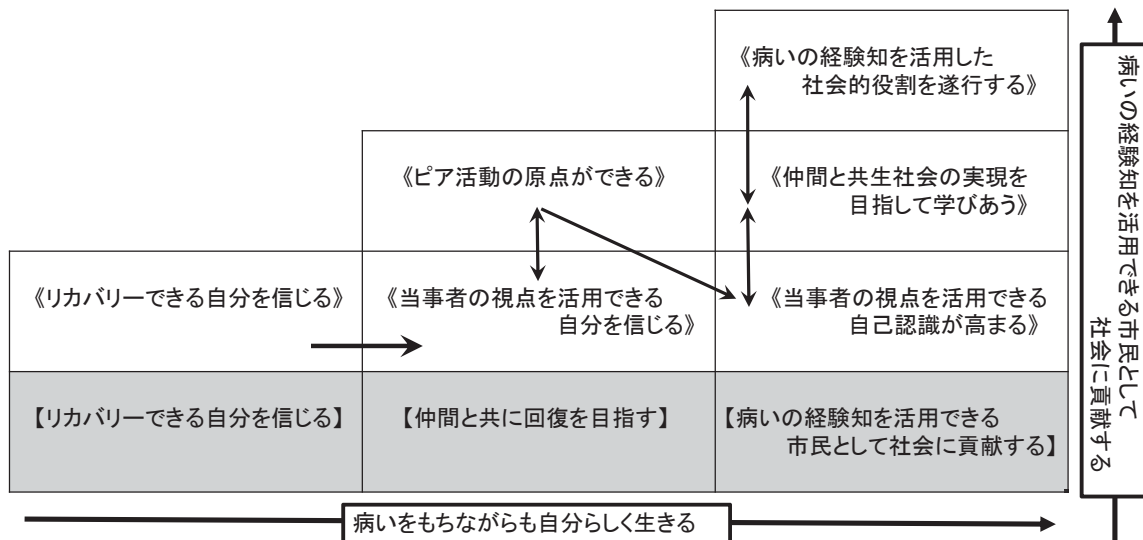


図3 語りに対する聞き手の承認を得て、リカバリーを実感し、社会変革に向けて行動していく過程
(リカバリーの物語普及型)

語りは語り手と聞き手の相互作用によって構築されるという特性があり、聞き手の反応が語りを行った本人のエンパワメントに影響を与える。自己の生き様が綴られた語りに対して、聞き手が無関心／否定的な反応である場合は、自己否定につながり、エンパワメントが減退される。その際、『リカバリーの物語普及型』の人々は、援助者や他のメンバーの支持を得て、学校のニーズに応じた物語に書き換えることができ、共生社会の実現に向けた語りになるよう創意工夫がみられた。このように、このタイプの人々には精神疾患を患うことで生じる課題を乗り越えるなかで、人生に新たな意味や目標を見出すという「リカバリー」(Anthony 1993)がみられた。リッジウェイ (Ridgway, P.) は「リカバリーは一つの過程であり、多くの部分からなる非直線的に展開する過程である」と指摘しており (Ridgway 2001)、リカバリーに至る過程の一つにあるエンパワメントも同様に非直線的な過程を辿ると言えよう。

第二に、語りを媒介とした組織的次元のエンパワメントの獲得過程を図式化した。その過程は、「語りに対する聞き手の承認を得て、リカバリーを実感し、社会変革に向けて行動していく過程」との命名を試みた。そして、各次元における語りの聞き手の増大とともに、語り手の自己変容(横軸)と社会変革(縦軸)がみられた。

自己変容に着目すると、Aさんのインタビューでは、少なくとも、面接では「患者」、グループでは「障害者／仲間」、教育講演会では「外部講師」というアイデンティティの多様性がみられ、各々のアイデンティティに基づく語りを主体的に使い分けることができていた。つまり、公共の場の語りにより「社会貢献」を実感できた人々は、子どもたちの教育的配慮に基づき「私が主人公」のリカバリーの物語を意図的に語っていたのである。

このことから、横軸は「病いをもちながらも自分らしく生きる」というリカバリーの促進を示し、状況に応じた語りの多様化により、多義的なアイデンティティがみられた。

一方「社会変革」に関して、Aさんをはじめ「びあの」のメンバーの語りによって、その語りの賛同者の増大が図られた。「びあの」の活動が企画化された背景には、スティグマ化された「精神障害者」が本来もつパワーを取り戻すために、自らの病いの語りを媒介として社会変革を目指す必要性があった。「びあの」の活動では、メンバー同士の語り合いにより、「精神障害者」をパワーレスな状態に追いやった抑圧構造のある社会に対する批判的意識が生まれるなかで、「びあの」の活動目標である「共生社会の実現」が「びあの」のグループ語りに織り込まれた。その語りを聞いた子どもたちには「共生社会の実現」に対する意識高揚がみられ、その子どもたちの肯定的な反応をみることによって、語りを行った本人にも社会貢献の認識が高まり、組織的次元のエンパワメントを獲得していた。このように、「びあの」の語りの承認者が増大すればするほど、社会にある精神障害者に対するマスターナラティブが書き換えられ、共生社会に向けた社会変革の可能性が生まれる。

このことから、縦軸は「病いの経験知を活用できる市民として社会に貢献する」という行動の促進を示し、語り

の賛同を得て、共生社会の実現に向けた語りの行動がみられた。

5. 教育講演会活動の参加では組織的次元のエンパワメントの獲得に結びつかなかった事例

「びあの」の活動を継続しながらも「びあの」の実践枠組みでは組織的次元のエンパワメントが獲得できないタイプとして、『ありのままの物語普及型』と『語りの活動模索型』が存在した。

1. 『ありのままの物語普及型』の人の特徴

『ありのままの物語普及型』のタイプは、「びあの」の活動を継続しながらも、聞き手のニーズに応じた「精神障害者の定型化されたリカバリーの物語」ではなく、「赤裸々な病的体験を織り込んだ自己物語」の語りを望む人であり、Eさんのみが対象だった。

Eさんは、10歳代で発病し、入退院を繰り返しながら、法人Zの施設を利用するようになった。その時、語り部グループ「びあの」の活動を知り、その参加を希望した。

初回の面接で、Eさんは「病いの経験を言葉にして伝えたい」と語っていた（面接：個人的次元）。しかし、精神症状がいまだ不安定であり、病いの体験の言語化が難しく、面接の途中でも幻聴によって会話が遮られることがあった。研修の場においても、Eさんが「サラダことば」と言いながらみせる原稿は強い筆圧で大小様々な文字が行間に関係なく埋め尽くされていた。Eさんの自己物語は幼少期に遡るため、その作成は研修時間内に収まらず、援助者による面接が別途必要だった。その際、援助者には、Eさんと病いの経験の意味づけを行う共同作業が求められた。このように、精神症状が不安定で自分の感情や思考の言語化が困難なEさんは面接が多くなった（グループ：個人的次元）。

「びあの」の研修を重ねるなかで、「公共の語り」の原稿が完成できたメンバーから教育講演会にチャレンジする姿がみられるようになった。専門職を目指す学生に対する講演の情報を得たEさんはその講師を自ら希望すると、メンバーからの応援も得られた（グループ：対人関係的次元）。しかし、Eさんの自己物語は完成されず、援助者との「かけあい」形式で講演会に臨むことになった。その後の研修で、Eさんは語りに対して肯定的な反応だったと報告すると、他のメンバーから労いの言葉があった。自身の語りに学生の承認を得たEさんは仲間や援助者からも称賛され、「精神力や集中力がエンパワメントされて、自己分析できるようになった」と語っていた（講演：組織的+対人関係的+個人的次元）。Eさんは感情が先走るため、援助者との面接で自己物語を作成することが多い。ようやく完成したEさんの子どもに向けた語りの原稿は「葛藤は宝」というフレーズを織り込んだ物語だった。その物語を研修で披露すると、メンバーから「Eさんの物語はEさんの哲学、生き様になる」というフィードバックがあった。これを受けて、Eさんは「自分を表現することが、ケア、リハビリになり、リカバリーしていく自分になる」と語っていた（講演：個人的+対人関係的次元）。その頃より、Eさんの精神症状が軽減され、他のメンバーと建設的な議論ができるようになった。

その後、研修では「病いの体験の伝え方」がテーマに上がり、各々の原稿の見直しを行うことになった。Eさんは「語りは哲学、どう病気とつきあってきたかを伝えたい」と発言した。援助者との面接では「生活が楽しい、ひどい症状がなくなり、専門用語でなく自分の言葉で語り直したい」と希望した（講演：個人的次元）。Eさんは「ありのままの経験を語りたい」と強く願い、自己物語を語り直した。その物語は、発病当初の戸惑い、コントロールできない病的体験、それが他害行為に及んだ体験などが綴られていた。その語りを研修の場で披露すると、他のメンバーから「子どもの精神障害者に対する偏見を助長させる」という批評がEさんに向けられた。「びあの」の教育講演会に対する依頼がほとんどない状況で、精神病の好発時期にある子どもたちに伝えたいものは何なのか、メンバー同士が模索しているなかでの出来事だった。Eさんが語る物語はEさん固有の物語であるが、聞き手にとっては「びあの」を代表する物語、ひいては、「精神障害者」の物語として位置づけられる。そのため、Eさんの語りは「びあの」が照準とする中高生に語るにはメンバーの賛同が得られなかったのである。Eさんにとって、そのことは自分の語りや援助者や同様の病いの経験をもつ当事者に限定された人びとを除いた社会に受け容れられないことを知覚させる契機にもなった。それは、Eさんの病いの意味づけに対する否定的な評価につながり、本人のエンパワメントを

減退させることになりうる。その頃から、Eさんの精神症状が不安定となり、他のメンバーの助言を反映した語り直しができず、援助者との面接を繰り返すことになった。援助者はEさん自身を責めているのではなく、Eさんの語りが中高生に向けられる時の限界を説明した。これにより、Eさんは自己信頼を得て（面接：個人的次元）、その後も研修に参加できたが（グループ：個人的次元）、ありのままの物語を語りたいという思いは変わらなかった。

その後、Eさんの語りに関する二つの転機があった。一つは、新たな語りの作成の方法を得たことである。ある研修で、Eさんと同様に自己物語の作成に困難を感じているメンバーの悩みが共有された。その時、熟練のメンバーから伝えたいことを箇条書きにする案があがった。研修後、Eさんは箇条書きで原稿の作成を援助者に願った。もう一つは、語りの聞き手を「子ども」ではなく、精神保健福祉領域の「専門職やそれを志願する学生」をも射程に入れたことである。ある日、援助者がヘルパー向けの講演会に関する情報提供を行うと、Eさんは語りを希望した（講演：個人的次元）。しかし、考えがまとまらないEさんは原稿ができないまま講演会の当日を迎えることになった。その後の研修で、Eさんは「原稿ができず、元気になるきっかけを話した」と笑顔で報告した。というのも、講演会はヘルパーの質問に応答する「かけあい」形式で行われたため、結果的に、援助者の面接と類似しており、Eさんにとって回答しやすかったという。援助者が「Eさんはものおじせずに質問に回答していた」と報告すると、Eさんは満足気な表情をみせた。つまり、Eさんの場合は、講演会形式よりも質問に応答する「かけあい」形式が適することが確認され、Eさんの即興力というストレンクスも共有されることになったのである（講演：組織的+対人関係的+個人的次元）。

以上のように、赤裸々な病的体験を語りたいと望む『ありのままの物語普及型』に属するEさんのエンパワメントの獲得過程は、語りの内容と聞き手の語りに対するニーズのマッチングの重要性を指摘する。しかし、「ぴあの」の活動は未だ精神障害者に偏見をもっていない子どもを聞き手とした語りの活動である。「ありのままの物語」を語ることは精神障害者に対する病状の理解と偏見の助長が隣りあわせであり、子どもたちの精神障害者に対する偏見の助長の危険性を考慮して、グループではEさんの希望に賛同できなかったのである。そのことはEさんのエンパワメントの減退、ひいては病状への影響がみられた。つまり、このタイプはエンパワメントの各次元の可逆性も経験していたのである。

Eさんがエンパワメントを獲得できたのは、「子ども」ではなく、「専門職やそれを志願する学生」を聞き手として語りを行った時だった。プラマー（Plummer, K.）の指摘にみられるように、公共の場の語りとは、精神障害者に偏見がある社会に向けて語ることを通じて、社会変革を目指すものである（Plummer 1998）。そのことを鑑みると、Eさんの語りの聞き手が「子ども」から「専門職やそれを志願する学生」になったことは、語りの場の安全性の代償として、聞き手を「制限」したことになりうる。先述のように、赤裸々な病的体験を伝えることが真の意味での社会変革につながることを鑑みれば、病いの語りに関心を示さない人々とのように接点をもち、ありのままの語りを共有できるかが公共の語りの設計における論点となる。それに関して、よりマクロな政治的次元の活動を見据えながら、「公共の語り」の裏舞台にある「面接・グループの語り」の場で検討する必要がある。

2. 『語りの活動模索型』の人々の特徴

「語りの活動模索型」の人々は、「ぴあの」の活動に参加しながらも、その継続が困難であり、語りの活動を模索している人々である。その理由として、以下の三点がある。

第一に、「語りの活動」と自分の社会活動との揺らぎがある。このタイプの人々は4名中3名が30歳代と他のメンバー（50歳前後）に比して年齢層が若く、自身の社会生活に悩む姿がみられた。このタイプは「自分のような辛い体験をする子どもを一人でも減らしたい」という「ぴあの」の活動への参加動機が共通しており、子どもに「正しい知識の習得」「相談相手の大切さ」を語ることが多かった。彼／彼女らは自身の語りに対する子どもの肯定的な反応を得てやりがいを感じる一方で、同世代の人々の就職や結婚等のライフイベントを目の当たりにすることで、語りの活動に将来の不安を抱く姿がみられた。

語りの活動をしたいが、人生これでよいのか悩む…、同世代をみるとこれでよいとふっきれない自分がいる。
働くことを考えてしまう…。ありのままに生きていきたい、…迷う。

教育講演会で求められる語りは「リカバリーの物語」であり、「病いになっても大丈夫」というメッセージを子どもたちに伝授する（柴 2014）。病状が不安定ななかで「リカバリーの物語」を語ることに躊躇する一方で、「普通の生活」を目指して就職活動等にエネルギーを費やす場合は語りの活動を継続するインセンティブの保持が難しい。加えて、精神障害者に対する偏見がある社会において、顔を出す／本名を名乗ることへの抵抗感もあった。

第二に、公共の語りのもつ特徴に対する二つの不安がみられた。一つは、語りの作成作業による精神症状の追体験の不安である。「びあの」の活動では、聞き手の子どもたちに配慮して発病当時の様子を語ることが求められる。しかし、「辛い体験を思い出そうとすると、今もしんどくなる」とメンバーが表現するように、発病当時の追体験を回避したいとの思いから自己物語の作成に躊躇する場面が多々みられた。

語りの活動は自分がどこまでチャレンジできるのかという期待と、20年もかかって、やっと楽になったのに、語ることで再びしんどくならないかという不安がある。ずっと悩みながら参加している。

この発病当時の様子に関して、『リカバリーの物語普及型』のタイプは、子どもたちの理解の促進を目指して、生活用語を用いた自己定義に書き換えるなどの創意工夫がみられた。このような語りの作成により「あやふやだった記憶が整理された」という自己物語の一貫性や、「当時のしんどさが理解できた」という自己理解の促進がみられた。しかし、「語りの活動模索型」の人々は、発病からの時間の経過も少なく、未だ病状が安定しないなかで、発病当時の経験の客観視が困難だったのである。

もう一つは、語りの承認の不安がある。冒頭で述べたように、公共の場の語りの聞き手は面接やグループの聞き手と異なり、精神障害者の語りに関心を示すとは限らない。聞き手の反応が否定的／無関心な反応であれば自己否定感や活動の参加意欲の低下につながる。これに関して、『語りの活動模索型』に属するメンバーは、次のように語っていた。

語って、しんどくなった。自分は人の役に立つことができたのか、単なる語りで終わったのか…。得るものがなかった…。

別のメンバーは、高校生に向けて行った講演について、次のように語っていた。

自分の経験をもとに、誰でも病いになる経験があることを伝えただけ、あまり受け容れられなかった。質問は恋愛のことやファッションのことだった…少し、距離をおきたい。

語りを行った本人がエンパワメントを獲得するには、聞き手の承認は重要な要素である。『リカバリーの物語普及型』のメンバーは「語りの聞き手の承認を得て、リカバリーを実感し、社会変革に向けて行動する過程」を辿っていたが、『語りの活動模索型』のメンバーには自身の語りの承認／成功体験を自己認識する機会が多くなかったため、彼／彼女らは組織的次元のエンパワメントの獲得を目的としつつも、実質的には「びあの」の活動において援助者による「面接」が多く利用されることになった。

援助者はその面接の価値を見出しながらも、『語りの活動模索型』のメンバーの「びあの」の活動に参加する理由が精神障害者に対する正しい知識の習得を目指す教育の必要性や早期相談体制の整備といった社会変革を願うものだったことから、先行研究にみる本人への受容的な「面接」や病いの経験に関する情緒的支援の「グループの語り」で完結することに留まらず、本人の語りの文脈によって「面接」「グループの語り」の内容に「公共の語り」である「びあの」の活動への参加が可能な方途を示してきた。

たとえば、「びあの」の活動を一時停止し、就労を目指した活動に転じたメンバーに対して、援助者は本人の希望に即した就労支援を行いながらも、面接の文脈によって「びあの」の活動に関する情報を提供していた。そのため、本人が研修に参加する場面もみられ、他のメンバーも「びあの」の一員として違和感なく受け入れていた。その経験をしたメンバーが援助者や他のメンバーに「語りの活動に戻れば、受け入れてほしい」と伝える場面もみられ、「公

共の場の語り」の活動の価値を否定することはなかったのである。

このように、『語りの活動模索型』のメンバーにとって、「面接」や「グループの語り」が各々に独立して存在するのではなく、公共の場の語りの必要性和それに向けて活動した経験を踏まえた「面接」や共生社会の実現を目指す仲間同士の「グループの語り」となることに意義がある。公共の語りの活動を目標に据えることで、面接や就労を目指す活動に対するインセンティブを得る可能性が生まれる。つまり、『語りの活動模索型』のメンバーは「自己信頼」「語りの活動による経験の拡大」といった個人的次元のエンパワメントや、「グループの所属感」「仲間意識の高揚」「批判的意識の高揚」という対人関係的次元のエンパワメントを獲得したと言えないだろうか。

このことから、組織的次元におけるエンパワメント実践は、単に組織的次元のエンパワメントの獲得を必ずしも目的とするのではなく、個人的次元と対人関係的次元に留まりつつ、そこで個々の次元を断絶して設定した時には得られないエンパワメントを、各々の次元にもたらすよう働きかけることが目標かつ出発点となると言えよう。

5. まとめと今後の課題

本研究の目的は、組織的次元のエンパワメント実践として設計した、語り部グループ「びあの」の活動によって、組織的次元のエンパワメントの獲得状況とその特徴を明らかにすることである。得られた知見は、次の三点である。

第一点目は、組織的次元のエンパワメントは個人的次元／対人関係的次元のそれと相互関連性がみられ、エンパワメントの次元の拡大とともに、語りの承認を得て、リカバリーを実感する自己変容と語りの承認者の増大という社会変革がみられた。第二点目は、語りの承認には語りの内容と聞き手のニーズのマッチングが重要な点である。本来、社会変革を目指すエンパワメント実践では、精神障害者の語りに無関心／否定的な人々の意識変容が目標となる。精神障害者の語りを聞きたいと望む人々に向けて、その語りを届けることは聞き手の承認を得やすいが、その語りに関心をもたない人々との境界を明確にすることになる。一方、語りの承認を優先してしまうと、その語りは聞き手のニーズに応じた語りにつくりあげなければならない。この語りの承認における両義性をふまえ、社会変革をもたらす語りのエンパワメント実践の方策を探るためには、組織的次元のエンパワメントを獲得後、社会変革を目指して独自の活動を始めた『語りの活動発展型』の人々の活動分析が有効的となろう(栄 2016)。第三点目は、公共の語りによる組織的次元のエンパワメントは個人的次元／対人関係的次元を往還的・重層的に獲得していくものだった。この要因には、聞き手の反応が語り手のエンパワメントに反映されるという「語り」そのものの限界が考えられる。その場合は就労や演劇・絵画といった自己表現など、個々人のストレングスを活用したエンパワメント実践の企画が望まれる。最後に、本研究で、語りの場として設定した「学校」における精神保健福祉教育の取組の必要性がある。思春期・青年期に精神疾患の好発時期があるにもかかわらず、「多忙」「他障害の授業がある」等の理由で当事者による語りに基づく実践が困難だった。精神疾患が5大疾患の一つとなった今、当事者と専門職と教職員が協働して当事者の病いの経験を活用した「こころの健康」に関する教材づくりが必要と言える。

文献

- Anthony, W. A. (1993) Recovery from mental illness : The guiding vision of the mental health service system in the 1990s. *Psychosocial Rehabilitation Journal*, 16 (4), 11-23.
- Conger, J.V. & Kanungo, R.N. (1988) The empowerment process: Integrating theory and practice. *Academy of Management Review*, 13 (3), 471-482.
- デシ, E.L. 著、安藤延男・石田梅男訳 (1980) 『内発的動機づけ——実験社会倫理的アプローチ』 誠信書房。
- フレイレ, P. 著、小沢有作・楠原影・柿沼秀雄・伊藤周訳 (1979) 『被抑圧者の教育学』 亜紀書房。
- グティエーレス, L.M., パーソンズ, R.J., コックス, E.O. 著、小松源助監訳 (2004) 『ソーシャルワーク実践におけるエンパワメント』 相川書房。
- Lee, A.B. (1994) *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Colombia University Press.
- 向谷地生良 (2009) 『統合失調症を持つ人への援助論——人とのつながりを取り戻すために』 金剛出版。
- ブラマー, K. 著、桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳 (1998) 『セクシャル・ストーリーの時代——語りのポリティクス』 新曜社。

- Ridgway, P. (2001) Re-storying psychiatric disability: Learning from first person narrative accounts of recovery. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, 24 (4) 335-343.
- Rotter, J.B. (1966) Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- 栄セツコ (2014) 「社会貢献としての病いの語り——精神障害当事者による福祉教育の「場」に着目して」『Core Ethics』 Vol.10, 109-120.
- 栄セツコ (2015) 「精神障害当事者にエンパワメントをもたらす公共の語りの設計」『Core Ethics』 Vol.11, 83-94.
- 栄セツコ (2016) 「精神障害当事者の語りをもたらす社会変革の可能性」『Core Ethics』 Vol.12, 89-101.
- Solomon, B.B. (1976) *Black Empowerment: Social Work in Oppressed Communities*, Columbia University Press.
- やどかりブックレット編集委員会編 (2005) 『伝えたい この気持ち、この願い』 やどかり出版.

謝辞

本論文の作成にあたり、インタビューにご協力いただきました A さんと E さん、並びに活動を共にした語り部グループ「びあの」の皆さまに感謝します。

本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 (C) 「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の普及に向けたシステム構築に関する研究」(課題番号 15KO3996) 及び平成 28 年度桃山学院大学総合研究所特定個人研究費の助成による研究成果の一部である。

The Empowerment of People with Mental Disorders by Making Public Talks: A Case Study of *Piano*, a Mental Health Education Group to School Children

SAKAE Setsuko

Abstract:

Many of previous studies on the empowerment of “narrative” focus on the narrative of the personal dimension (face-to-face interview) and the interpersonal-relationship dimension (group discussion), but there is little practical research on the narrative of the organizational dimension (talk in public space). To examine the process of empowerment and its characteristics, this paper analyzes the case of the practice of *Piano*, a volunteer group for mental health education that organizes public talks to school children by people with mental disorders. The author interviewed the tellers and observed the reactions of children by participating their activities. The result finds that their talks achieved sympathy of the listeners in the personal, the interpersonal-relationship, and the organizational dimensions, and the tellers experienced the process of empowerment by realizing recovery of the self and more motivation to act towards social change. The characteristics of empowerment was more back and forth in multilayers of these dimension rather than linear development. In conclusion, to achieve and develop the narrative in the organizational dimension, it is necessary to have the narrative of the personal and the interpersonal-relational dimensions of the tellers, as well as enlargement of the kinds of listeners and public places to have their talks accepted.

Keywords: people with mental disorders, empowerment, public talk, recovery, social change,

公共の場の語りによる精神障害当事者のエンパワメントの 獲得過程とその特徴

——語り部グループ「ぴあの」の語りの実践から——

栄 セツコ

要旨：

「語り」のエンパワメント研究では、個人的次元（面接）や対人関係的次元（グループ）の語りの研究が多いが、組織的次元（公共の場）の語りに着目した実践的研究は乏しい。そこで、本稿の目的は語りによる組織的次元のエンパワメントの獲得過程とその特徴の解明にある。研究方法は、精神障害者による語り部グループ「ぴあの」の教育講演会活動に参加し、組織的次元のエンパワメントを獲得した人々の事例研究である。その結果、彼／彼女らは、個人的／対人関係的／組織的次元における語りの承認を得て、リカバリーを実感し、社会変革に向けて行動する過程を経験していた。そして、各次元のエンパワメントを往還的／重層的に獲得する点に特徴があった。このことから、語りによる組織的次元のエンパワメントの獲得には、面接やグループの語りの場が不可欠であり、語りの承認が得られる対象の拡大や多面的な語りの場の開発が必要であると結論づける。

